

関 : この役を引き受けるにあたり、参加者の男女の比率を同じにしてもらいたいとお願いした。 。  
今回1 : 1になっていて、自治体のこういう検討委員会などではなかなか見られないこと。  
変えていくというのはこういう小さなことから始まるのだと思う。  
富良野市の街づくりについて伺っていくが、文化振興条例をつくるにあたって、まず最初に富良野市が目指しているものはどういうものか皆で情報共有していき、その中で文化をどのような位置づけでいくのか。になっていくと思う。  
街づくりの検討をしながら文化をどのように続けていけばいいかを一緒に考えていきましょう。

関澤 : (説明)

桑原 : 基本的な質問を2点。

総合計画策定にあたり、各分野とあるが具体的に教えてもらいたい。

関澤 : 概要には載せきれず、本編に基本施策として具体的にどういった事業・目標かを項目ごとに細分化しています。

桑原 : 文化芸術振興条例の検討にあたり、係わる分野というのは文化・スポーツだけを意識して検討していけばいいのか。

この質問の意図は、文化というのは捉え方が非常に広いので、どこに焦点を当てて協議をしていったらいいのか、漠然と自分の中で、視点が定まらないので聞いた。

安西 : 以前は文化振興条例あるいは文化振興計画が他の市町村でも作られ、純粋に文化というところで取組まれていたものが、変わってきていて、単なる文化だけではなく観光、福祉、教育などの総合的な考え方を幅広く文化振興の中に取り入れ、街づくりの一環とする策。

文化関係者だけでなく、様々な分野の方の幅広い意見で作っていきたい考え。

桑原 : 条例の根幹を作るという責任の重大さの意識を持った。

まず本市の状況がどうで、何が課題で、何を改善していかなければならないか、という視点で考えた時に小冊子の中の市民意識調査結果から本市の課題が見つけられない。

特に文化を選択してみても「概ね満足している」傾向が見られる。

なぜこのような実態調査になっているかということ、設問の中に「普通」というのがあるから。

人間は「普通」という項目があればそれを選ぶ傾向にある。

私の認識だが、「普通」という選択肢を作ったが為に課題が見えづらくなった。

文化という話を進めるにあたり、本市が将来的に何をしたいと条例の中に何を盛り込んでいくか、話が漠然としすぎている。

私は学校教育の立場からだけでいいのか。

今後進めていく中で、話の柱をいくつか具体的に示してもらった方が、建設的な話合いになるのでは、と思う。

ただ集まって思いつきでそれぞれの委員の思いを伝えていっても、条例の文言にはならない。

去年もそういう形で終わってしまったのではなかったか。

協議していく柱について都度示してもらおうと、各々の専門的な立場から話ができる。

関 : 仰る通り、意識調査やアンケートをやってから条例策定が一番確実だと思う。

来年3月まで制定しなければならないという状況の中で、どこまで市民の意見が反映できるか心配なところ。

富良野市の今の課題は何か、ということと、どうやって可視化していくか。

これから富良野市の文化政策について話を聞くが、その後それぞれが関わっている文化にどのような課題を感じているか、原因は何かをボードに書きながらキーワードを出していく。その上で、今回は今回出たキーワードに近い事例を参考にして進めようと思っている。今までは行政側がある程度枠組みを決めて、それに基づき議論をするのが通常のやり方だったと思う。

「共創」という言葉が出てきているが、市民と行政が対等な関係でやっていくものと思っているので、事務局が示すものではなく、検討委員会がどんどん言葉を出していき、それを形にしていくながら行政だと私は思っている。

枠組みを示すのを待つよりは、我々が枠組みを決めていくという姿勢でやっていけたらありがたい。

桑原 : ではまず芸術という視点で、それぞれの委員がどう思っているかを伝えればいいのか？

関 : まず富良野市の文化政策について説明します。

次に富良野市の文化活動や文化についての課題、原因について話し合いたい。

文化は広くて、価値観も関わってくる。

どこまでが文化芸術の領域なのか、ばかりにハマってしまうと抽象的な話になってしまうので、改善したい点、この課題の原因はどこにあるのかを議論できる場になってもらいたい。

墓田 : (説明)

藤田 : 文化振興基金条例は基金だけに定めた条例？

墓田 : はい。

藤田 : 一本化は可能？別々ということ？

安西 : 基金条例について。

元々は基金の運用利息でやっていくものだったが、昨今の低金利で基金を取り崩して財源にあてている。文化を進めていくうえで、一般財源だけでは取り組めないものに基金をあてる。その使い方について謳っている条例のこと。

基金条例と今回作る振興条例とは別々と市として考えています。

藤田 : 振興条例と基金条例と二つあるのはちょっと・・・。一つにしたらどうだ。

いやわかりました。ごめんなさい。

関 : 条例が作られたことにより基金条例を残すのか、合体させて一つのものにするのか調査します。

条例ができたことにより財源はどう確保するのか心配なさっていると思うので、財源確保の明言があるかも含めて調査します。

「富良野における文化活動あるいは文化芸術の課題とその原因」ということで、皆さんが日頃感じていることを、どんどん出してもらいたい。

課題を共有することはとても重要だし、課題だけでなく起きている原因を、突き詰めていくことにより直さなければならないものが見えてくる。

文化芸術、活動の中での課題もあるが、富良野市が抱えている地域課題とは何か、そこに文化芸術が役に立つとしたらどんなことができるのか。

地域課題に文化芸術が役に立てるという観点を考えていくことにより、条例の幅に広がりが出てくる。

藤田 : 富良野文化協会に加盟せずに個々に活動している。加盟しようと思ってもハードルがある。

若い人達は色々な活動をしているのに、入ってきていない。

広がっていかない一つの要因では？

原田：富良野文化協会の会長として、各団体等をまとめているが、まとめに対して拘束を受けたくないという団体がある。

それは経済的な負担もあるだろうし、組織に入り協力していく余裕が若い人にはない。

自分の活動は自身でできるが、人の面倒まで見るような組織活動には入りたくないという意識が強くあるのを感じている。

太田：月の加盟料を私は知らないが、おいくらくらい？

原田：基本額が1,000円ほど。

太田：若い世代が入らないというのは、よくわかる。

入ったらメリットがあるから入る。今の文化協会にはどんなメリットが？

原田：一例だが、文化会館の使用料が半額。

太田：それは大きい。半額になっても文化会館を使用していないということ？

藤田：それを知らない人もいるかも。

実際はうまく伝わっていないのでは。

若い人には使用料が半額は大きなメリットだと思う。

関：これは富良野だけの課題ではない。

色々な地域で文化協会に若い人が入ってこない事例があるが、考え方として二つ。

① 文化協会としてジャンルが確立されてしまっているのではないかな。

今の若い人はジャンルが多様化しているのに、組織がついてきていない。

② 文化会館ではないもっと多様な場所で活動していきたいのでは。

原田：使用料は取らないが喫茶店の飲み物などの購入で使わせている所は実際にある。

桑原：どんな時も、協議する場に若い世代をどう巻き込むかは大きな課題。

20数年前に富良野小学校で一般教諭として6年間勤務し、20年ぶりに校長として富良野に戻ってきたが、率直に若者のエネルギーや街の活気は明らかに減っていると感じた。

若者世代は昔より受け身になっているので、我々世代が若者をどう巻き込むかという発想にならないといけない。

今回の検討委員の中にも、若い世代の委員がいたら生の意見が聞けたと思う。

ここで話しても若い世代がいないから、本音はわからず想像でしかないが、若いエネルギーを使っていかなないと街はどんどん元気を失くす。

地域懇談会という場を市長が作ってくれているが、参加者に若者を見たことはない。

たまに居るのは役所の人らしき人物。

若者の意識と考えを奮い起こして、街づくりの戦力として巻き込んでいくのは相当難しいがやらなければならない。

藤田：私は、若い人が文化協会に入る必要は無く、それぞれのジャンルで楽しめる環境があれば一番いいのかと思う。

受け身の文化は時代のことで仕方がないが、生活の中に文化を取り入れる流れは少しずつながらあると思う。

ここで聞いたことを自分のところに来る若者に問いかけてみたりして、育てる手助けができる。

- 関 : 生活環境が変わってきている中で、コミュニケーションが大事になってきている。  
演劇のコミュニケーション教育で高めようとしているのが、富良野ならではの力かと思うし富良野の文化力でもある。大切にしていきたい。
- 岡本 : 私は親子劇場に参加しているが、会員が増えず減る一方。  
なぜかと考えると、グループを作り人と関わっていく、不特定多数の人と関係を作っていくことが若い世代は苦手で、身内や身近な友人とだけつきあって交友が広がらない。  
放射型ではなく点と点が結びつくような関係性が広がっていく。  
世代間でアプローチの仕方が違うのをどう埋めていったらいいか。
- 関 : 今までは都市の中の若者の生活がそうであったであろうと思うが、コロナになって地域の若者も都市化してきている気がする。  
地域は人と人とが肌感覚でぶつかり合うことで、成り立ってきたと思うのでそれを取り戻すために、文化芸術が担う役割はどんなものがあるか考えなければならない。
- 篠田 : 野球に関わっているが、この一年で、野球のルールも知らない、ただ楽しそうだということだけで、関わってくれる人が大勢いることを知った、  
若者のエネルギーに喜びを感じている。  
今までは組織、グループ単位でしか動けなかったものがそれを取り払おうとしていると感じる。
- 桑原 : 演劇を通したコミュニケーション能力の教育については、非常に大きな効果があると私は思う。  
ただちょっと残念なのは、明らかな富良野市の教育の特色になっていない。  
演劇祭についても繋がっていかないのが現実問題。  
麓郷の子供たちの演劇を見て、感動したしこの学校には演劇が根付いていると感じた。  
教育の場で芸術文化を漠然と示さずに、演劇を通した特色ある教育課程の編成みたいな形で、富良野市の教育行政の目玉として打ち出してもらえれば、これに沿った学校作りができ、文化が演劇が子供たちの日常に根付いていくのではないか。  
全員がステージに立って演技するのがいいとは思わない。  
得意、不得意があり、裏方がいてチームとしての芸術であるから、学ぶことができる。
- 太田 : 自分の言いたかったことを先に言われましたが、これを一番に言いたかった。  
麓郷中、布部小中学校、樹海中、は3~8年間舞台に立ち続ける。  
この継続するということは本当に大きい。  
市内の小学校は4年生の一度しかチャンスがない。  
それっきりだと身につかないし、表現力、コミュニケーション能力にも大きく差が出る。  
教育委員会からお金を頂いて学校コミュニケーション能力という授業を1学校で3回やっているが、それではたかが知れている程度のもの。  
だから学校の先生と共に、もっと演劇を通して表現力、コミュニケーション能力を学ばせたい。  
是非、条例の中に入れて作ってほしい。
- 関 : 演劇の話しが出たが、実は学校教育だけでなく会合をするにも演劇の手法が使われている。  
例えば韓国に結婚で移住した人はなかなか文化に馴染めない。  
声を大きく出したいが誰も聞いてくれないので、自分たちで作品を作り韓国生活の中で何に困っているのかを演劇を通して自己表現をする。  
それを韓国の人が見て理解するというやり方をしている。

演劇は、教育だけでなく介護、医療、外国人の暮らしなど様々な場でも使われている。

演劇を中核とした街づくり、演劇がなにかしらに関われる街づくりになっていけたらいい。

岡本 : 小学校は演劇指導があったり中学高校はそれぞれ自分のやりたい道へ進んでいけばいいが、未就学児も自然に演劇に触れるような、機会や環境が地元でもあればいいと思う。私個人で札幌や旭川に出向いて探している状況。

関 : 原因を探ってみましょう。意見をお願いします。

篠田 : 20年前に演劇工場が作られる際、子供はダメという流れになりかけ、何とか親子室ができた。親子一緒に見れるような環境作りは必要。たまり～ばは使用料が高い。

関 : 文化芸術の活動の場を広く考えていかないといけないし、それは条例の中でも示されていくとよい。

劇場だけでなく街全体が文化活動の場であると捉えられると、事業費も助成金がおりにやすくなったりするのかなと思う。

その文言は必要。

次は、富良野が抱えている地域課題について。

吉田 : 富良野は高校を出たら、ほとんど地元に残らず外へ出ていく。

戻って来る人は出先で出身を聞かれ、富良野と答えるといい所から来たねと言われる。

そこで初めて外の人からどう思われているのかを知る。

富良野を出る前に良さを知り、残りたいと思わせるものがあったとしてもよいのではないか。

だとすれば文化芸術が役に立つのではないか。

太田 : 一昨年から富良野ハイスクールシアターというものをやっている。

演劇に触れて楽しかったのに続いてやる機会がなく、やりたいのにやれない子たちが集まる。

ワークショップをやるがそこに来る子達は学校に馴染んでいない子が多い。

不登校の子供の居場所として演劇の活動は、役に立つ。

学校には行けないけどここなら行けるといふ子達の受け皿になりたい。

関 : 学校に行かない子は自己肯定感が低い傾向にあるが、演劇を通して自己実現力を高められる。

吉田 : 富良野の食文化について。

ワインくらいしか無いが、みんなで一緒に美味しいものを食べ、楽しい時間を共有していけばいい。

自分達より前の世代がやってきたことだが、自然の中で味噌を作るとか原点に遡りやっていきたい。

関 : 移住して来た方はなかなか先住者とコミュニケーションがとれない。

そういった方と味噌作りをすとか一緒に食べるとかをしながら定着していくきっかけにまる。その意味で食文化は富良野では大事にしていきたいもの。

原田 : 北の峰で自治会をしているが、よそから来たが新しい発想で私たちに提案してくる。

よそから来た人をうまく町内会や地域で活用することが大事。

運営側がうまく若い人を活用できれば力を発揮してもらえる可能性はたくさんある。

関 : 先程の食文化の話は、先住者や年配の方とのコミュニケーションツールになるという話。

一方で演劇を産業化していく観点で考えると、富良野は観光が一つのキーワードであると思わ

れる。

食文化と演劇を繋げて、文化観光を作ることはできる？

太田 : できます。

ふらの舞台塾の公演を全国をやめ、富良野でしか見られないロングラン公演にした。

一か月毎日やっていけば、そこには泊まる、食べる、ということを外の人はやる。

それはまさしく、演劇による街づくりである。

飲食店、宿泊施設と連携した経済効果はあった。

関 : 文化庁の方も、文化観光をやっている。

宿泊業、飲食店、劇場の三者関係に、文化が加わることでもう少し広がりができるのでは。

一緒に見る、体験するような所は富良野にはありますか？

太田 : ないです。

岡本 : 文化的なことかはわからないが、私は農家だが収穫体験はよその人が集まる傾向にある。

味噌作りなどは移住して来た若い方が多い。

地元の若い人には不人気だが、観光的に見れば魅力的なこと。

篠田 : ギャラに関係なく富良野に来たいアーティストは山ほどいる。

アーティストきっかけで見にくる人も大勢いる。

ただ富良野に来るだけでなく、富良野らしいものを加え、組み合わせながらやるといい。

いいものを持っているのに生かしきれていない。

関 : 演劇を見る人は特定の目的があって来るが、それ以外には、いかに富良野を感じてもらおうかがすごく大事。

そこには、演劇があり、食文化があり、農業があり、富良野を感じてもらおう為の文化プログラムがもう少し広く作られていくと色んな人が関わりやすい。

他分野との連携は条例には欠かせない。

藤田 : 北の峰地区にアジアの資本が随分入ってきていて、地域の崩壊にも繋がりがねない事態にある。

コミュニケーション、地域との連携が取れないまま定住外国人が住み、うまくいかない。

文化振興条例をうまく使ってもらい、真の国際化を進めてもらいたい。

世界のリゾート地になってきているが、この問題は早く手をうたないと大変なことになる。

関 : とても重要な視点。

地域課題に文化がどう貢献できるのか考えていかないとならない。

コミュニティーという言葉は、条例に入れたい。

次は富良野がこうなったらいいなど、明るいご意見ありますか。

原田 : 北の峰地域では、建物の色、高さに制限があるが、それは自然をそっくり残してほしいという願いからそうなっている。

外国資本にそれを理解してもらうのはなかなか難しい。

行政が壁になり、目指す目標を持ちストップのかけられる富良野市であってほしい。

関 : 防災関係を演劇を通じて外国人に知らせている市がある。

文章では動かなかったり、読まなかつたりするので、文化芸術の力で解決できたら。

太田 : オレオレ詐欺撲滅も富良野高校の演劇部がやった。

- 吉田 : 富良野に文化の香りがすると言う人もいる。  
富良野の文化についてどこに情報を求めたらいいのかわからない。  
簡単なようでなかなか探せない。  
一目瞭然でわかるものが欲しい。  
何故それが出来ないのか聞いたら、それぞれの事業に責任は持てないと言われた。
- 関 : 情報ステーションというのは行政側で作るのは非常に難しい。  
若い人はネットの使い方が上手だから、NPOなどを立ち上げ、自分たちで発信していくような  
仕組みだけ補助していくと活性化していくのでは。  
新文化ホールができるが、一緒に情報発信機能をつけていけたらいい。  
文化情報発信というのは、相談窓口も一緒に作られていかなければならない。  
市民から文化の相談を受け、それを発信していくには専門的人材が必要だと思うので、今後議  
論が必要。
- 岡本 : 子供たちが富良野を大切に思えるような街にしていきたい。  
地元の思い出がたくさんあって、出て行ったとしても戻ってきて富良野の為に何かしたいと思  
えるような富良野になってほしい。
- 関 : コミュニティー 人と人との関りを大切にする。  
子供が生き生きとする街にする。  
0~100歳まで演劇にかかわれる街にする。  
学校教育の中に基盤として根付いていく。  
この4つのキーワードで似ている条例をピックアップして、次回又議論していきたい。